

常盤台北遺跡

—横浜国立大学学生寮建設地内の
埋蔵文化財発掘調査報告—

平成 2 年 3 月

横 浜 国 立 大 学

序 に 代 え て

教育学部長 鶴 見 尚 弘

横浜国立大学のキャンパス常盤台地区一帯が縄文後期の貝塚分布地域であったことは古くから知られていたが、その後の度重なるゴルフ場の造成によって、多くの遺構は破壊され攪乱をうけた。

1974年に横浜国立大学教育学部がこの地に移転して以後は、埋蔵文化財の保存運動に熱心な本学教授菊地康明先生や、本学非常勤講師で横浜市文化財審議委員・港北ニュータウン調査団長の岡本勇先生の指導のもとに、本学学生諸君の協力をえて、1976年から本学キャンパス内の残存遺構の調査が行われ、1980年に一通りの調査が終了した。その結果をまとめたものが、1982年3月に刊行された『常盤台遺跡—横浜国立大学構内における埋蔵文化財発掘調査の概報—』である。

ついで1989年に統合寮の建設計画が具体化されるにおよび、その予定地についても、菊地・岡本両先生の指導と卒業生・学生諸君の協力のもとに、同年秋に本格調査が実施され、本報告書を作成する事ができた。この遺跡を“常盤台北遺跡”と称したのは、統合寮建設予定地が、大学キャンパス近傍の北方飛び地にあることに困んだものであろう。菊地・岡本両先生には御多忙のところ貴重な時間をさいて熱心に学生の指導を頂いたが、とくに岡本先生には発掘から報告書の作成にいたるまで献身的に御盡力頂いた。心から感謝申しあげたい。また本報告書の刊行に当り、種々御配慮頂いた事務局ならびに教育学部事務職員の皆様、研究で多忙のところを遠方よりかけつけてくれた歴史教室卒業生の宮城学院女子大学助教授大平聰氏、東京都立大学大学院生浅野充氏はじめ在学生諸君の協力に対してもあらためて御礼申し上げる次第である。

目 次

I	調査の動機と経過	1
II	遺 跡	2
	1. 遺跡の位置と地形	2
	2. 周辺の遺跡	2
III	調査の概要	4
	1. トレンチ	4
	2. 発掘区	4
	3. 出土した遺物	7
	a. 土器	7
	b. 石器	7
IV	まとめ	8

挿 図 目 次

第1図	常盤台北遺跡の位置	3
第2図	地形と発掘区	5
第3図	集石の平面と断面	6

図 版 目 次

図版1	調査地点の近景（東方より）
図版2	調査地点の遠景（西方より）
図版3	北トレンチ全景（西南より）
図版4	Wトレンチ全景（南西より）
図版5	Sトレンチ全景
図版6	Cトレンチ全景（東方より）
図版7	掘さくの中のCトレンチ
図版8	A区全景（東南より）
図版9	発掘前のB・C区（西南より）
図版10	掘り上ったCトレンチ
図版11	Cトレンチ全景
図版12	断面の測図（C区）
図版13	C区全景（南東より）
図版14	作業風景（D区）
図版15	集石（D区）
図版16	集石の測図（D区）
図版17	土壌（A区）
図版18	土壌（A区）
図版19	土壌（A区）
図版20	土壌（D区）
図版21	土壌（B区）
図版22	陥し穴（A区）
図版23	石器・土器片，'80年試掘のさい出土，集石を形成する礫
図版24	A区褐色土層出土の土器片
図版25	C区黒色土層出土の土器片，C区褐色土層出土の土器片
図版26	D区褐色土層出土の土器片（表），D区褐色土層出土の土器片（裏）
図版27	D区黒色土層出土の土器片，D区黒色土層出土の石七

I 調査の動機と経過

1979年、われわれは横浜国立大学構内において、職員住宅建設地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施したが、これが終わった直後、キャンパスの北方、桜美林ハイツの西側に建設が予定されている学生寮の敷地内における埋蔵文化財の有無にかんする試掘調査を依頼された。同年12月、学生有志の協力をえてその作業をおこなった。

当時、その個処は一面の雑木林であり、地表に散布する遺物はみられなかったが、いくつかのテストピット（試掘坑）を設定し、遺構・遺物の有無とその出土の状態を調べることにした。その結果、今回調査のD区附近より散漫な状態で後期の縄文土器片その他が出土した（図版22）。

このさい、付近に遺物包含の中心地が存在する可能性が考えられるから、建設工事に先立って本格的な調査の必要があることを進言しておいた。それからちょうど10年が経過した1989年の秋、その発掘調査が実施されることになったのである。

かくて、調査は1989年9月19日から10月12日までの期間を要しておこなわれた。

Ⅱ 遺 跡

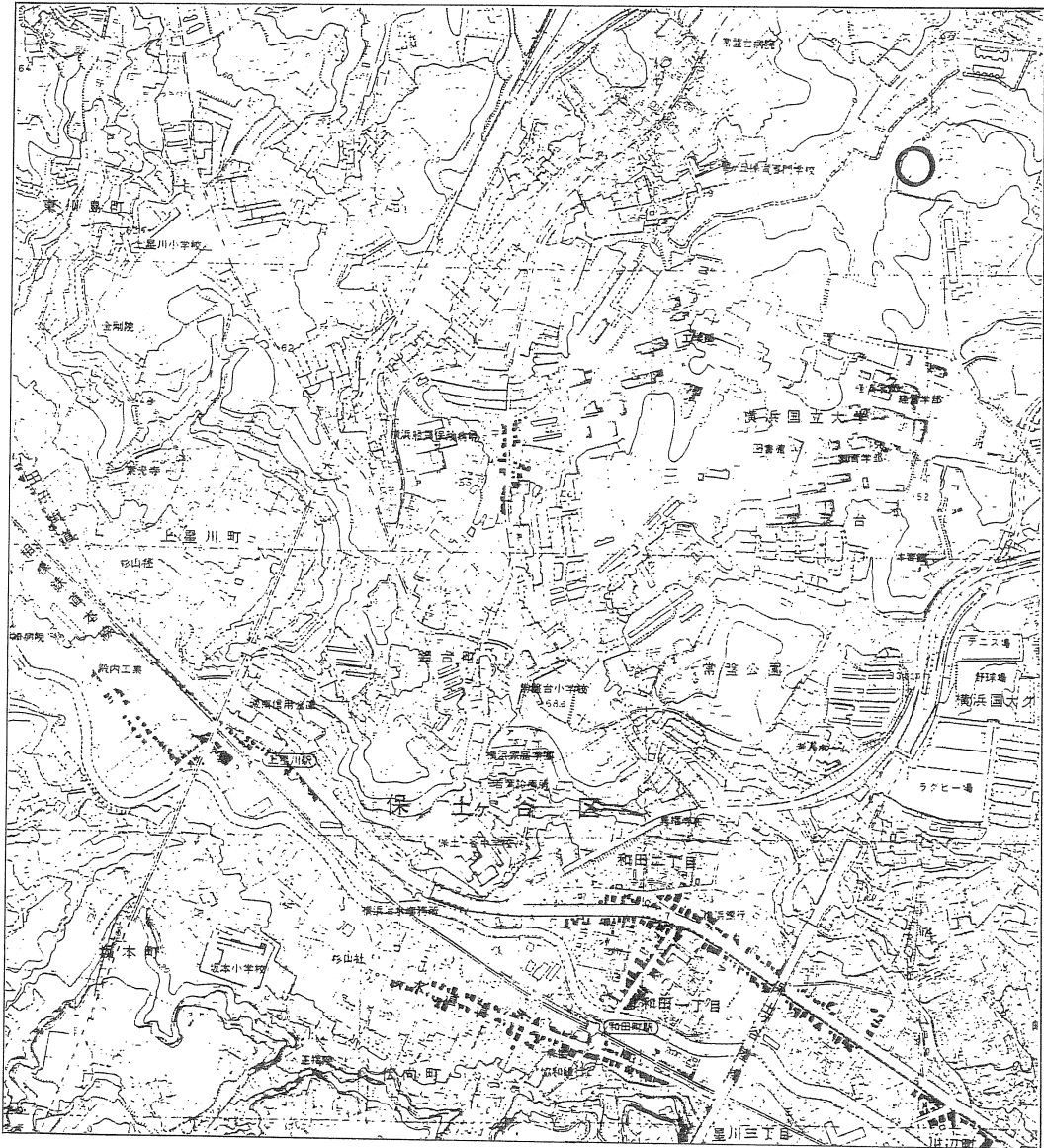
1. 遺跡の位置と地形

この遺跡は、横浜市保土ヶ谷区峰沢町305番地及び常盤台177番地にまたがって所在する。学生寮の建設予定地は、大学本部の北約350メートルの距離にある。常盤台から北にのびる台地は、開析をうけていくつもの谷が刻まれているが、標高50メートルラインの高さが台地のいわば頂部となっており、地形的に平坦な地貌を呈している。この部分には桜美林ハイツの住宅棟がならんでいる。その西側は、緩傾斜をなして滝川の流れる谷につながっている。今回の調査は、この緩斜面の標高44～48メートルの間でおこなわれた。そして、若干の遺構遺物を検出した。この事実にもとづき、縄文時代後期の貝塚、中期の竪穴住居址よりなる集落址をふくむ常盤台遺跡の北方約500メートル付近に位置するところから、便宜上、常盤台北遺跡とよぶこととしたい。

2. 周 辺 の 遺 跡

常盤台北遺跡の周辺には、いくつかの遺跡の存在が知られている。横浜国立大学のキャンパスとなっている常盤台には、前述した貝塚、集落址をはじめ19カ所の遺物発見地が知られている。また、本遺跡の西方、谷一つを距てた台地からは、後期の縄文土器が出土している。（現在、台地上は新菱興産株式会社のスポーツ施設となっているが、この整地工事のさいに事前の発掘調査がおこなわれ、縄文土器片など若干の遺物が出土した。また、東側には第三京浜道路、横浜新道などを結ぶ三ツ沢ジャンクションがあるが、この付近一帯が峰沢遺跡であり、道路工事に対処しての調査がおこなわれ、縄文時代中・後期の集落遺跡であることがあきらかにされた。その他、本遺跡の周辺における周知の遺跡は、10指を屈するにこと欠かない。いうなれば、あまたの埋蔵文化財の包蔵地にとり囲まれているような状態を示しているのである。

本遺跡の中心主体部は、現在桜美林ハイツの建ち並ぶ台地頂部の平坦部にあったものと思われるが、それを確認することはまったく不可能である。



第1図 常盤台北遺跡の位置 ○印

Ⅲ 調査の概要

1. トレンチ

学生寮建設予定地の東側を調査の対象とした。西半は、保存緑地を含み、かつ急傾斜を示しているため、遺構の発見を期待できなかったからである。調査の対象地は、雑木林であったからまずこれを伐採することから始まった。そして、ほぼ東西方向に平行する3本のトレンチを設定した。南寄りの部分にSトレンチ（幅3m×長さ100m）北寄りの個処にNトレンチ（幅3m×長さ60m）を設け、その中間にCトレンチ（幅3m×長さ100m）を設定した。さらに、S・Cトレンチの中間の両端にWトレンチ（幅3m×長さ10～20m）を設定した。各トレンチとも、大部分は重機で掘さくし、一部を手掘りでおこなった。その総面積は300㎡、深さは平均2メートルをはかった。いずれもローム面まで掘ったが、層序、堆積土に、とくに注意すべき所見はなかった。

S・Cトレンチとも、西から弯入した浅い谷にかかっており、堆積土は水分を多く含んでおり掘るのに難渋した。断面の実測、遺構・遺物の発見に極力意を払ったが、これらのトレンチからはなにも見出せなかった。

2. 発掘区

NトレンチとCトレンチの間に東西にならぶ四つの発掘区を設け、遺構・遺物の発見につとめた。

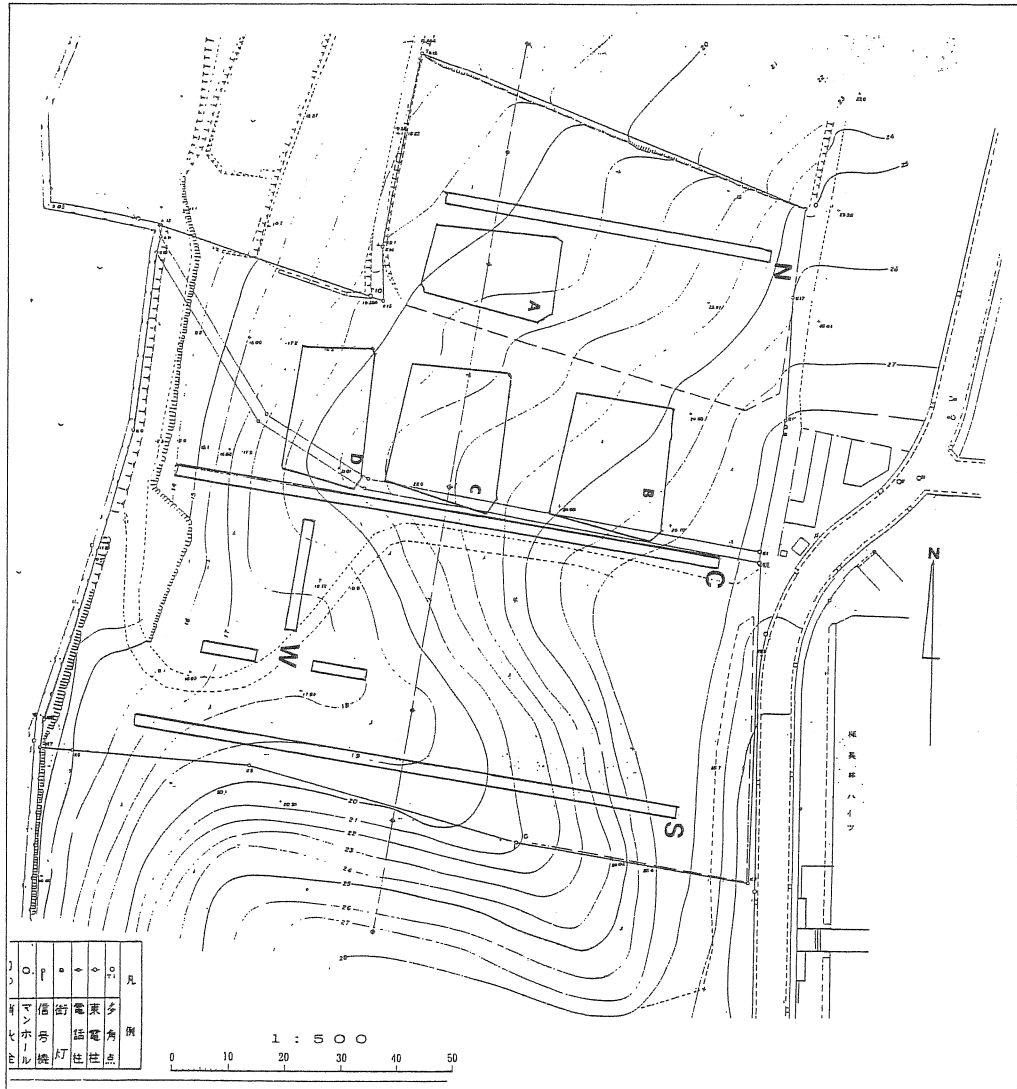
A区（22×15m）は、北寄りの個処に設定した。またそれに隣接して約10メートルの間隔において、B区（22×20m）、C区（25×20m）、D区（22×15m）の発掘区を設けた。各発掘区の長さ幅が不均等なのは、樹根の存在にわざわざいされてそれを避けた結果である。

A区からは5個の土壌が発見された。直径80～100cm、深さ90cmほどのものである。形は一定していない。（図版17・18）用途は不明である。また、陥し穴とみられるもの1例が（図版22）ある。長方形の平面をもつ。長さ120cm、深さ90cm、上半が削平されている可能性がある。

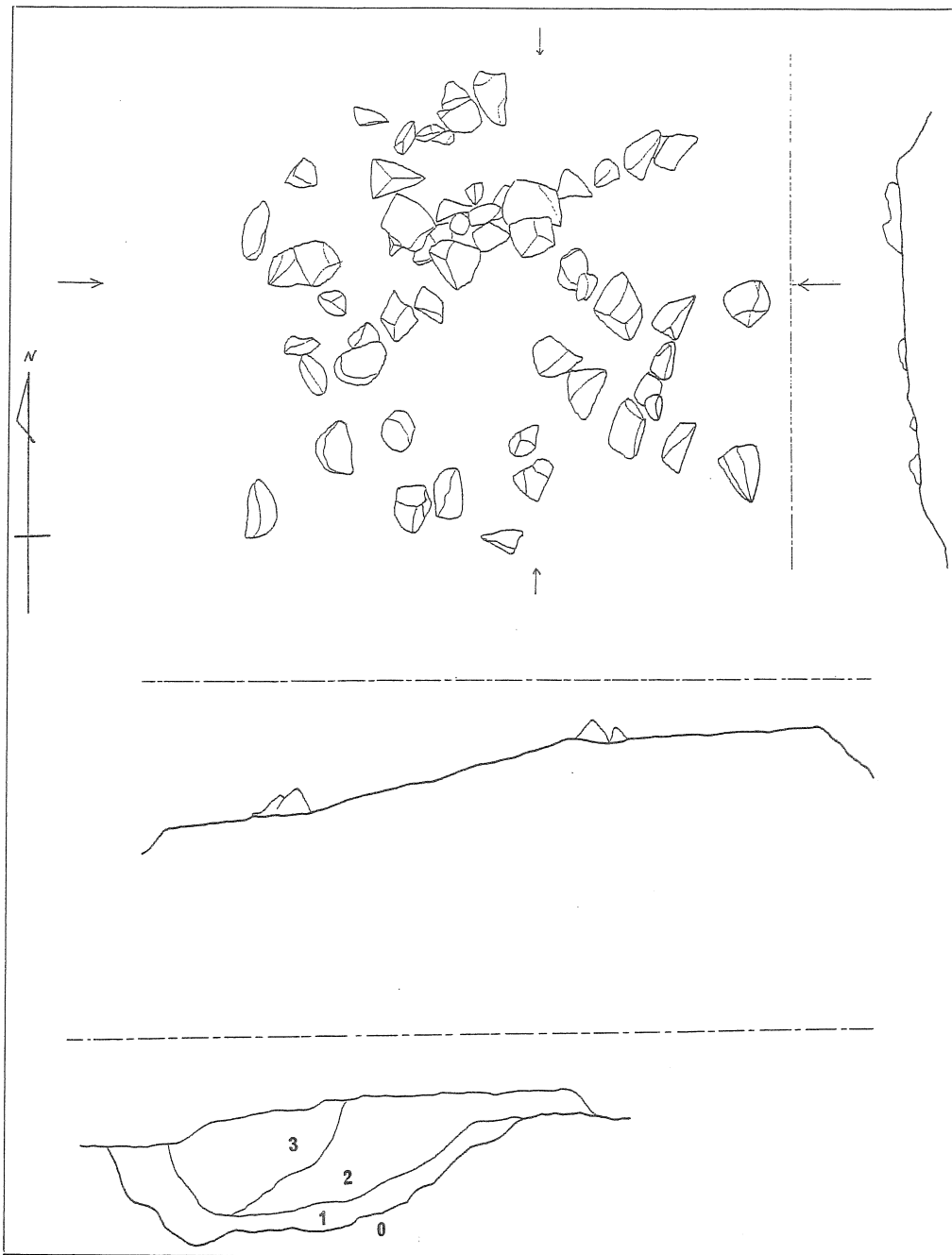
B区からは土壌1例が検出された（図版21）C区からは、4個の土壌が出土した。いずれも用途不明である。

D区からは、その中央部より集石遺構、その周囲より大小のピット約10個が発見された（図版20）。住居址の存在を予想して調べてみたが、床面、壁などの施設は検出できなかった。これらのピットのうちには、貯蔵穴（直径90cm、深さ80cm）を思わせるものもあった（図版20）。

集石は、表土下約50cmのところから出土した。東西約4m、南北3.5mの範囲に多数の礫が密集していた。円礫は少なく、割れて角礫を呈するものが多かった。礫は総数67個、重量20～300gである。大部分は拳大の大きさで火熱をうけているものがいくつかあった（図版23ノ下）。堀之内I式土器が伴出した。



第 2 図 地形と発掘区



第3図 集石の平面 (1/10) と断面 (1/20)

- | | | |
|---|-----------|------------------------------------|
| 0 | ソフトローム | |
| 1 | 黄褐色土 | やゝしまりあり、粘りあまりなし、粒度細かい。 |
| 2 | 暗褐色土 | しまりあり、粘りあり、赤色スコリアを含む (1~2 mm) |
| 3 | 暗チョコレート色土 | しまりあり (硬い) 粘りあり、赤色スコリアを含む (1~2 mm) |

3. 出土した遺物

a. 土器

今回の調査で出した土器は、いずれも破片で、その数は数十片にすぎない。
時期別、型式別にあらわすと、つぎのとおりである。

縄文土器

早期 広義の茅山式 表裏に条痕をもち、繊維痕をもつもの（図版25ノ下）

前期黒浜式 粗い縄文を有し、多量の繊維を含有するもの（図版26）

諸磯b式 半截竹管による縦横の文様をもつもの（図版27）

後期 堀之内I式この型式に属する土器は、A区、B区、C区、D区の各発掘区から出土しているし、また1980年の試掘のさいにも見出された。したがって、この遺跡の主体をなす土器は、しいていえば堀之内I式であるといえよう。なお、D区からは、常滑焼の陶器と思われるものの破片1個が出土している。

b. 石器

はっきりした石器としては、黒色珪岩製の石七1個がある。幅5cm、高さ4cm、厚さ6mmD区の褐色土層より出土した。堀之内I式土器に伴出した。

ほかに、磨製石器の断欠1、磨石1、打痕のある礫2などが発見されている。

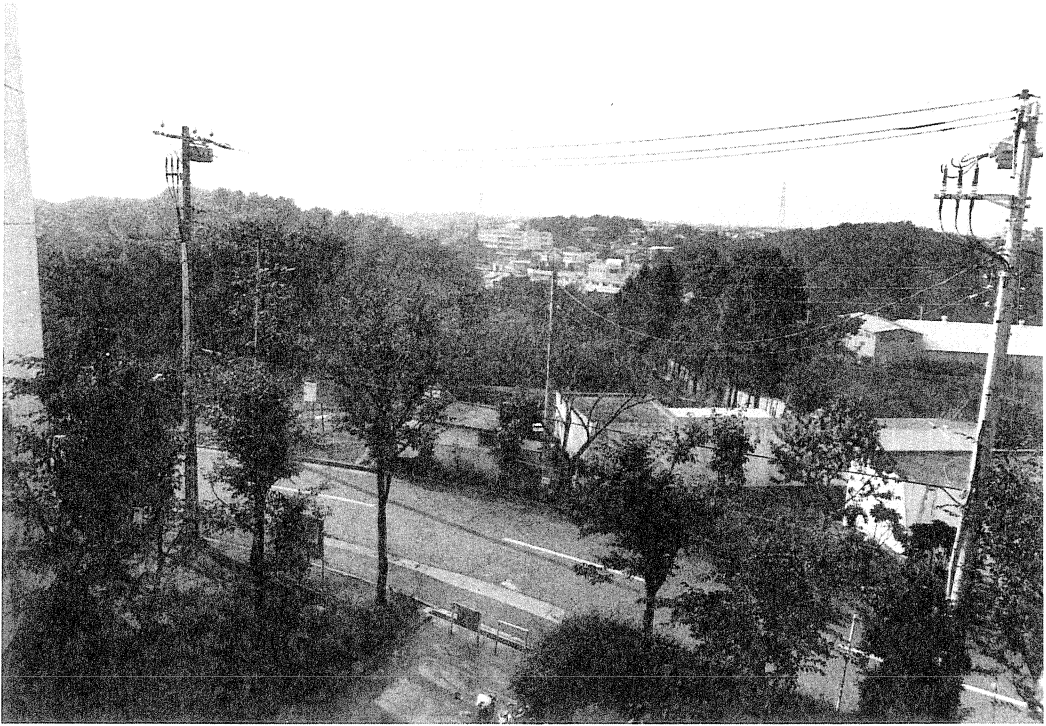
IV ま と め

今回の調査は、発掘可能な個処にすべて鍬をいれてみた。トレンチと発掘区、その総面積は、1,300㎡と広大な範囲に及んだ。しかし、それにもかかわらず、住居遺構などはまったく見出せなかった。この場所には、早期、前期、後期と各時期の縄文人が足を留めたわけだが、かれらはここに居を構え、定住したわけではなかった。おそらく、一時的な居住の場として、たんに歩をとめたにすぎなかったのであろう。一種のキャンプサイトとみるべきかもしれない。しかし、現在桜美林ハイツの建つ平坦部には居住址が残存する可能性をうち消すことはできない。

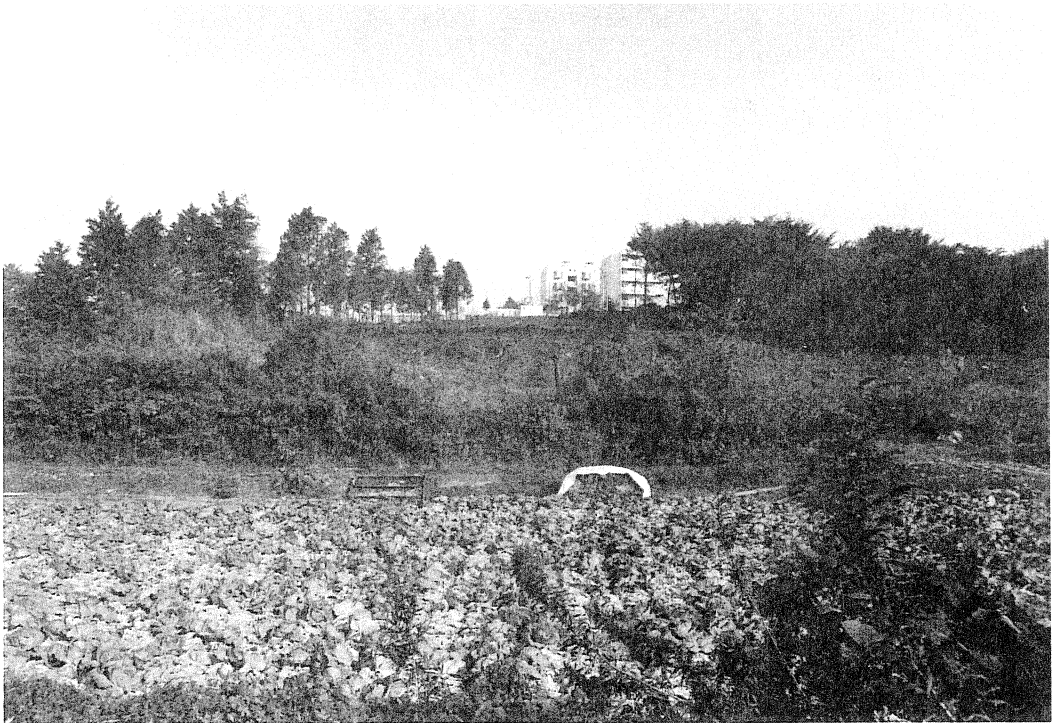
発掘担当者 菊地康明, 岡本 勇

協力者 大平 聡, 浅野 充, 青木勝士

他学生五名



図版1 調査地点の近景（東方より）



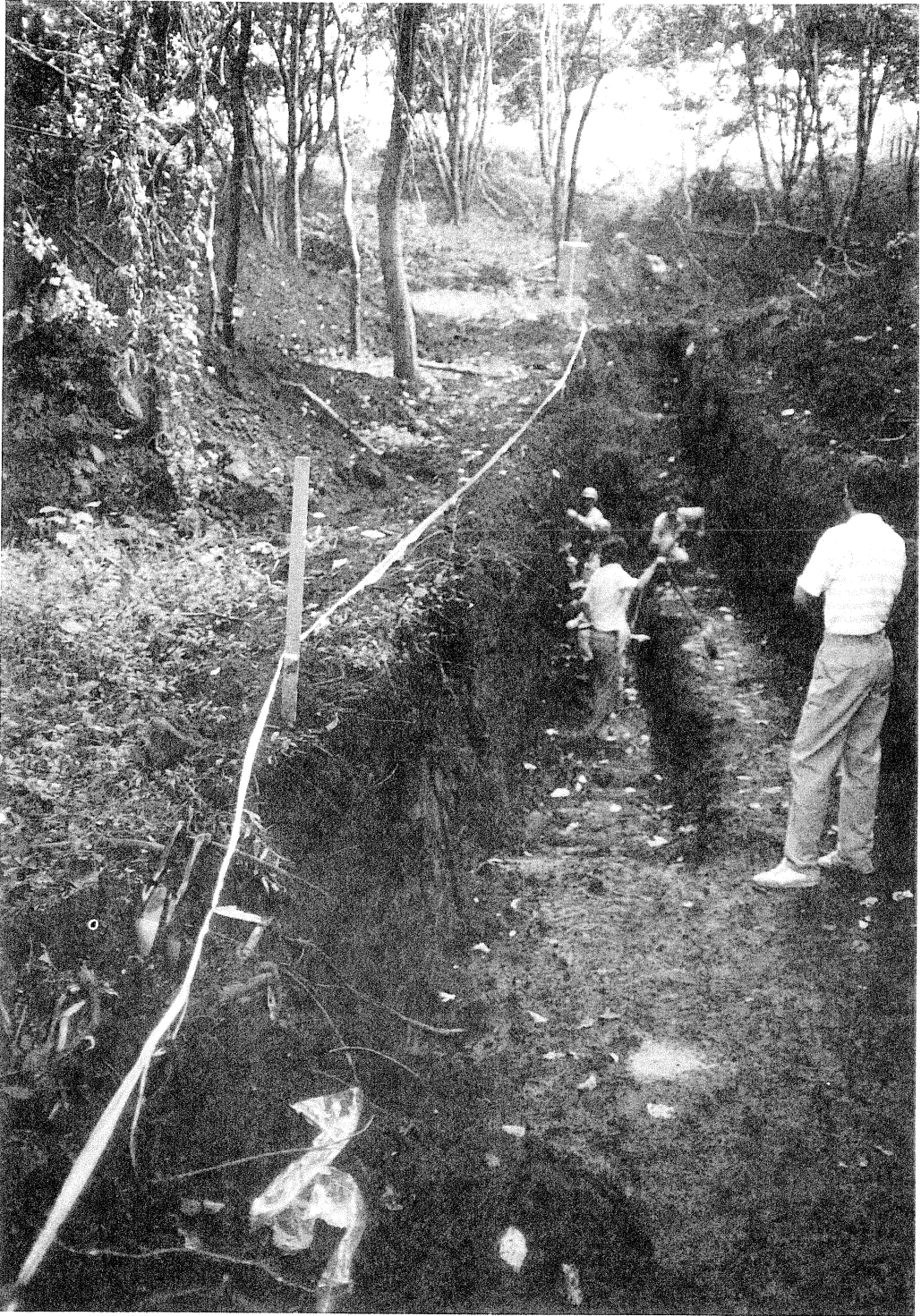
図版2 調査地点の遠景（西方より）



図版3 北トレンチ全景 (西南より)



図版4 Wトレンチ全景（南西より）



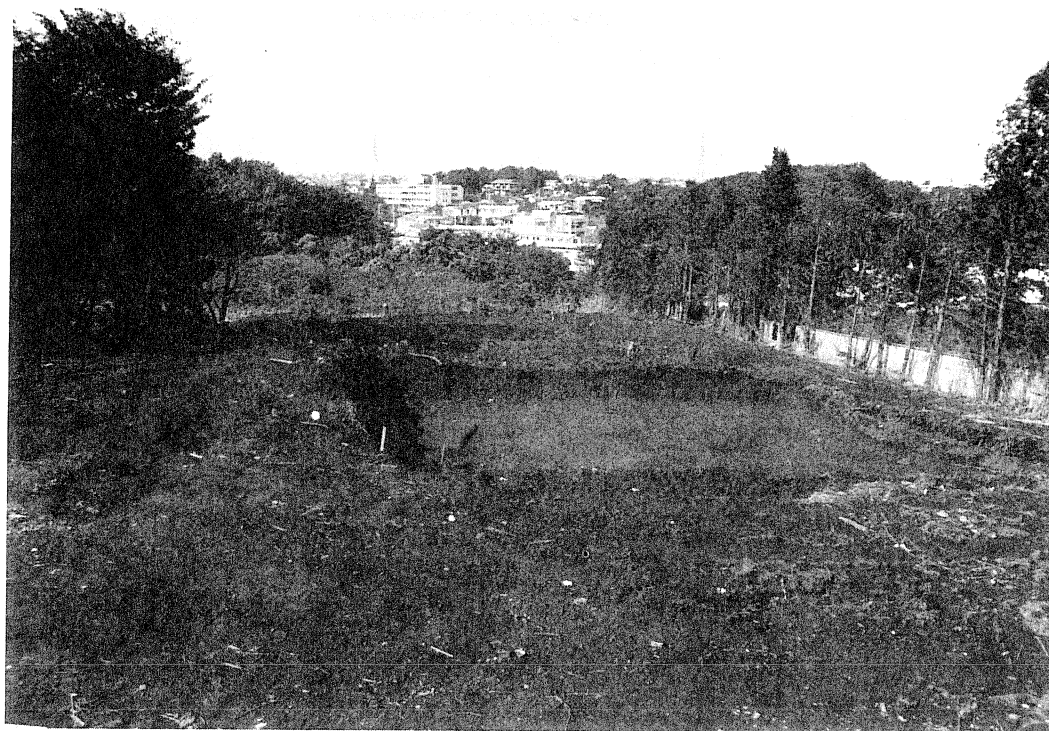
図版5 Sトレンチ全景



図版6 Cトレンチ全景（東方より）



図版7 掘さく中のCトレンチ



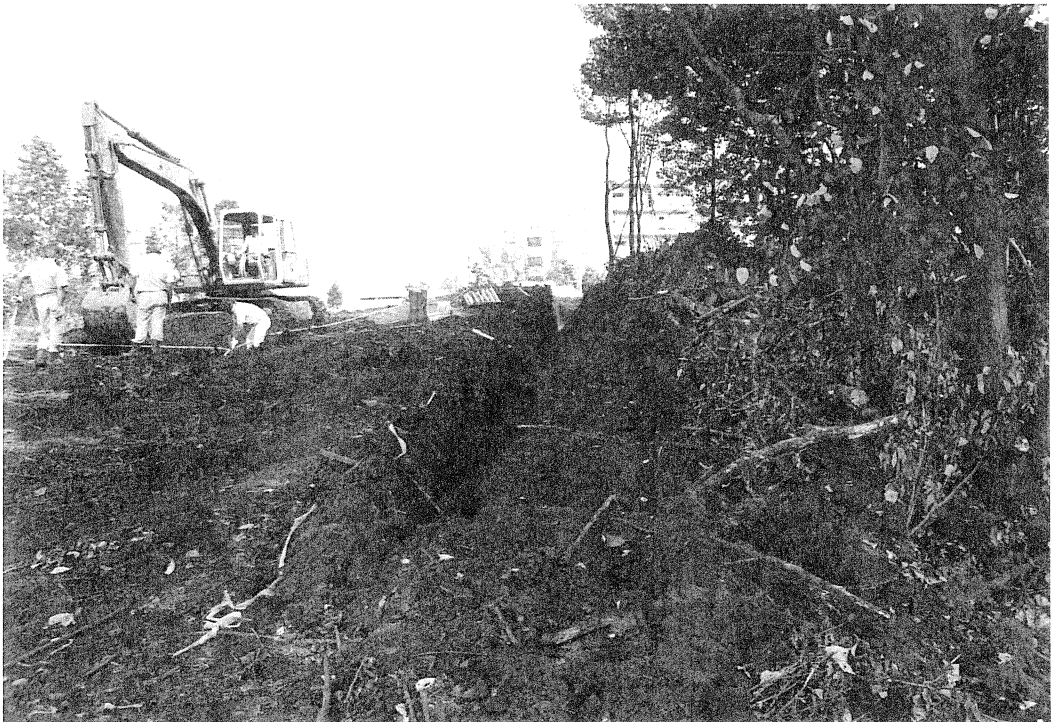
図版8 A区全景（東南より）



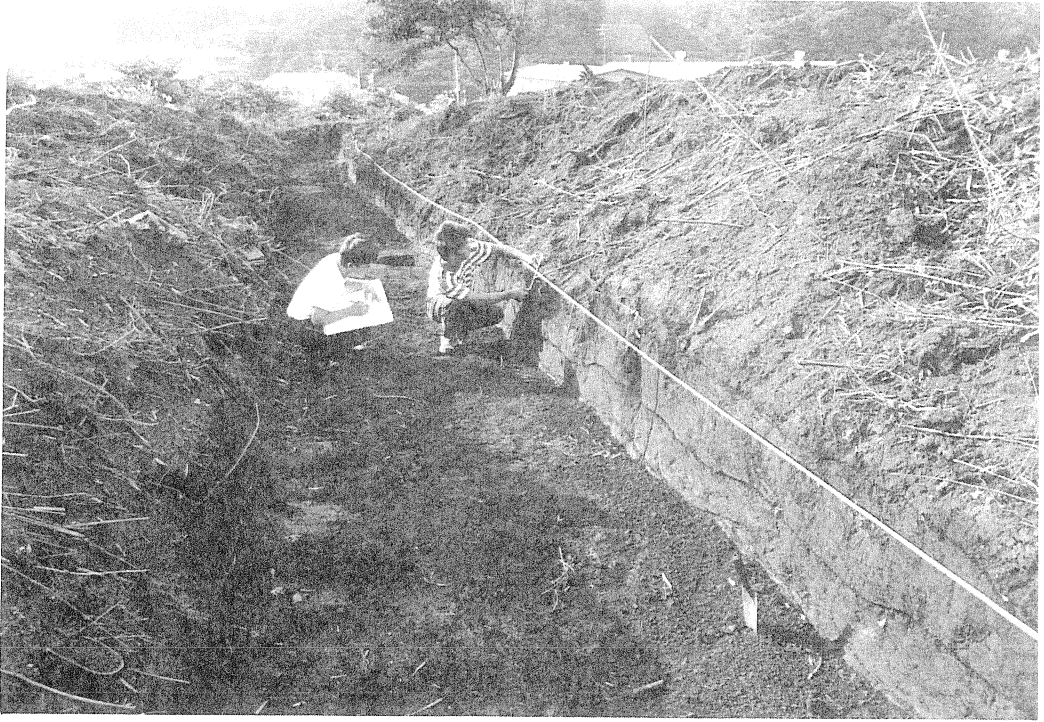
図版9 発掘前のB・C区（西南より）



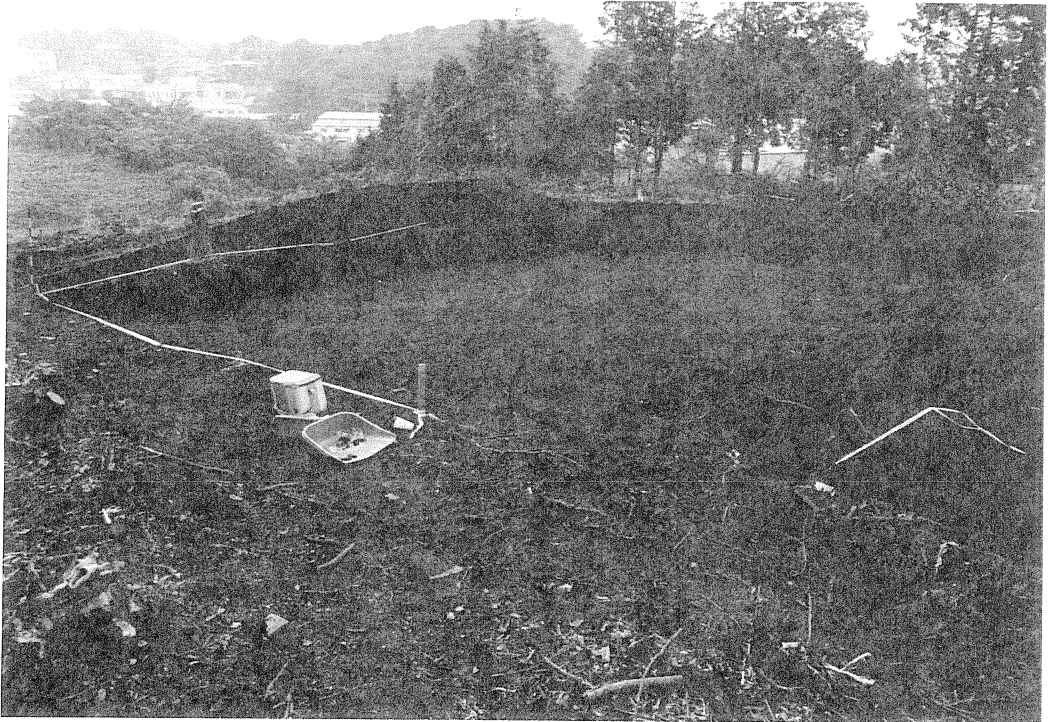
図版10 掘り上ったCトレンチ



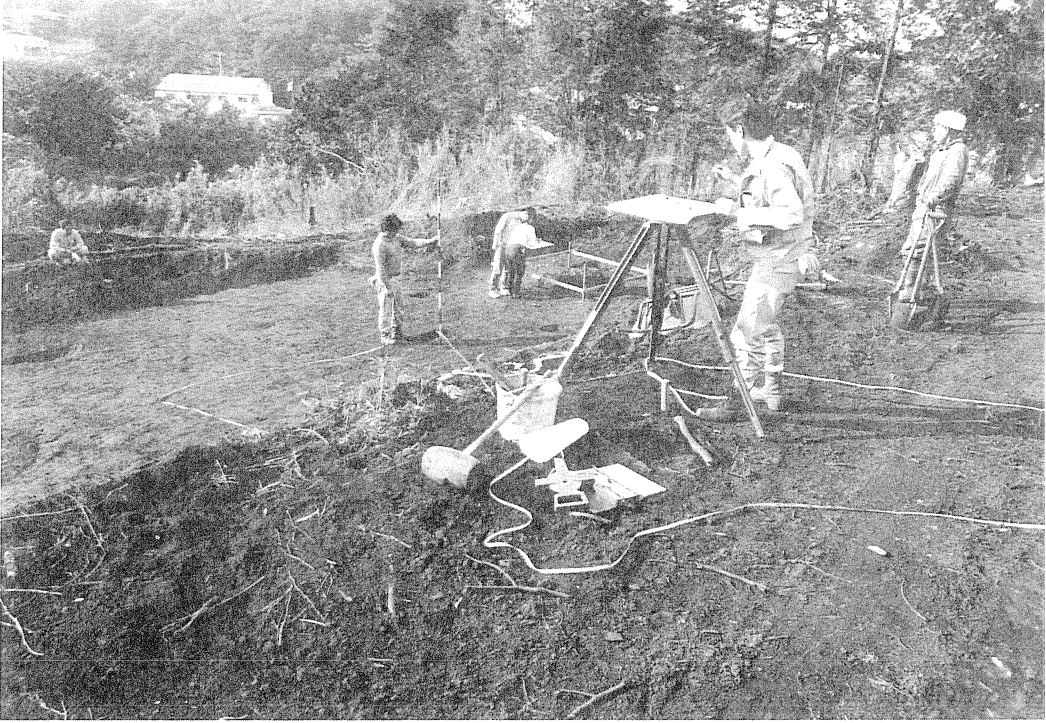
図版11 Cトレンチ全景



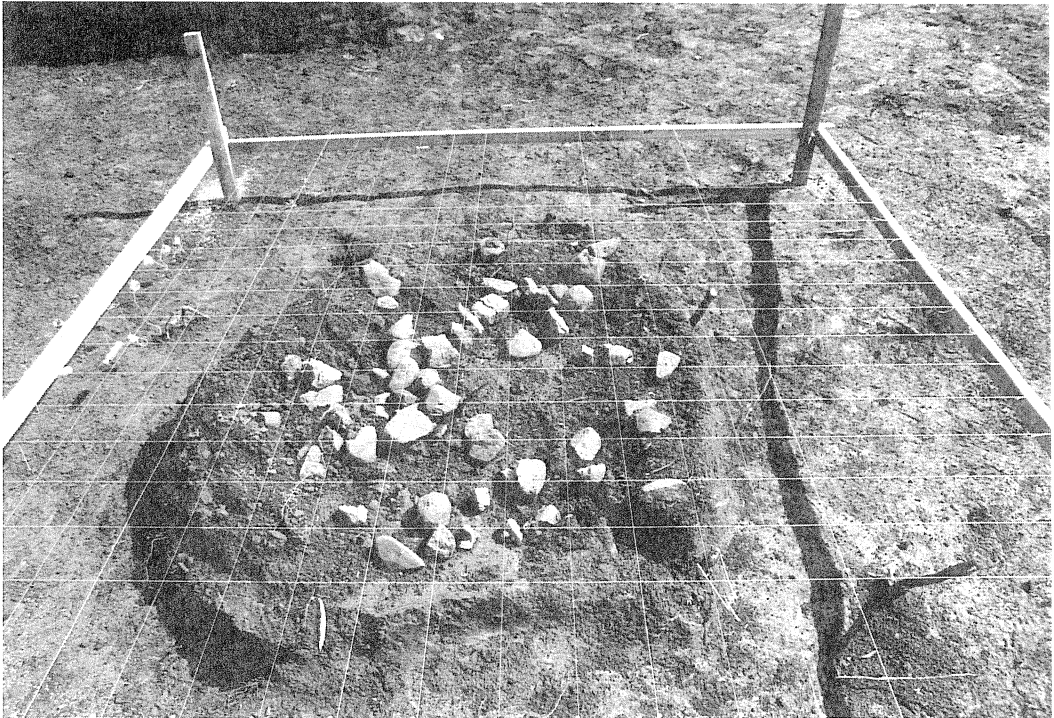
図版12 断面の測図（C区）



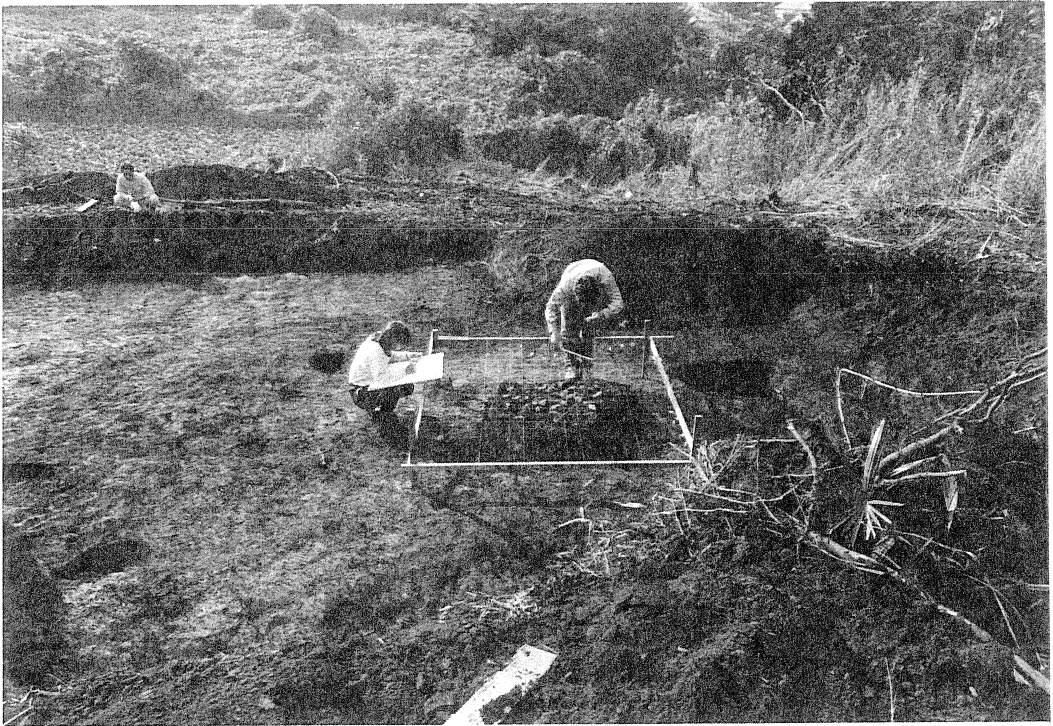
図版13 C区全景（南東より）



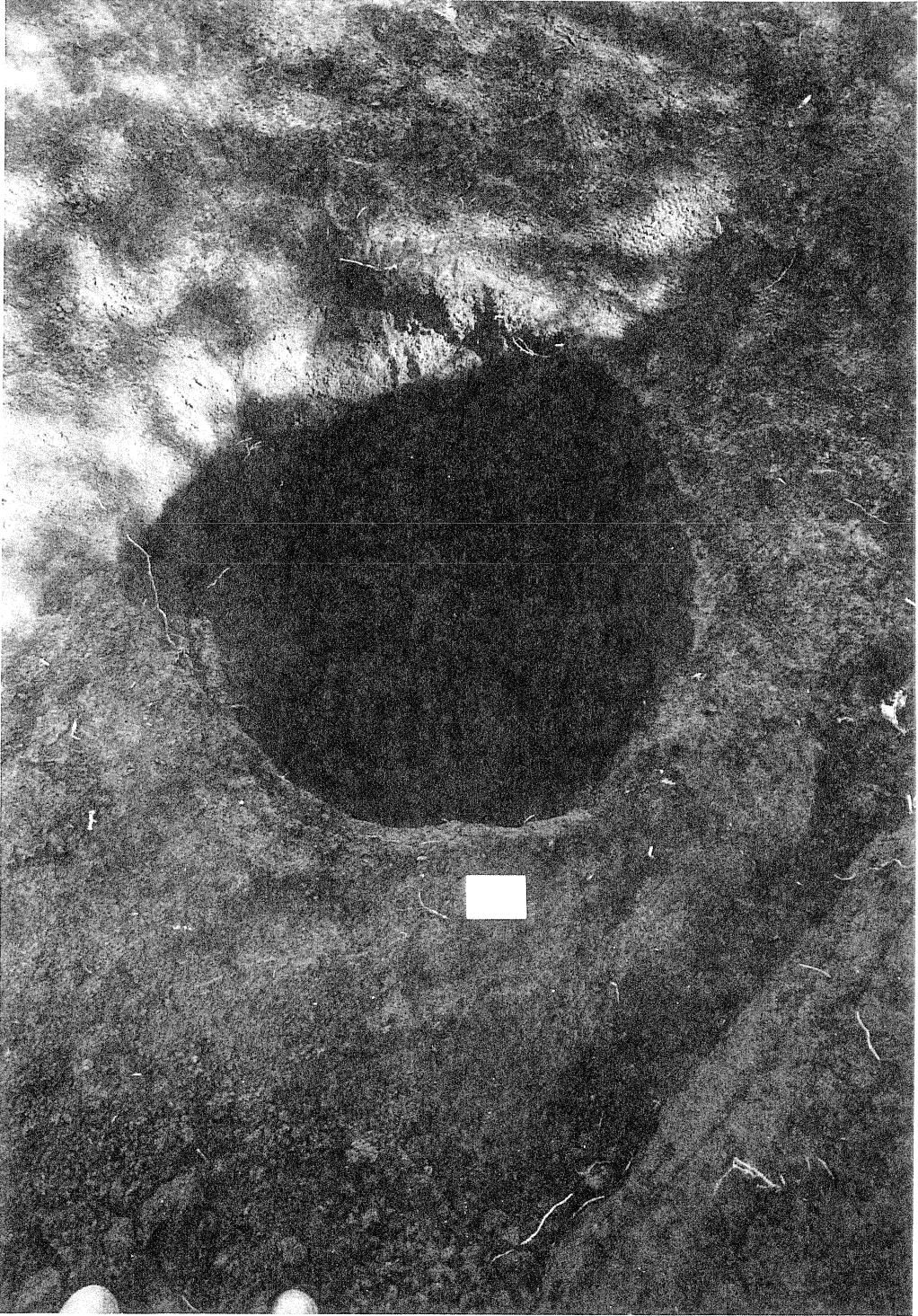
図版14 作業風景 (D区)



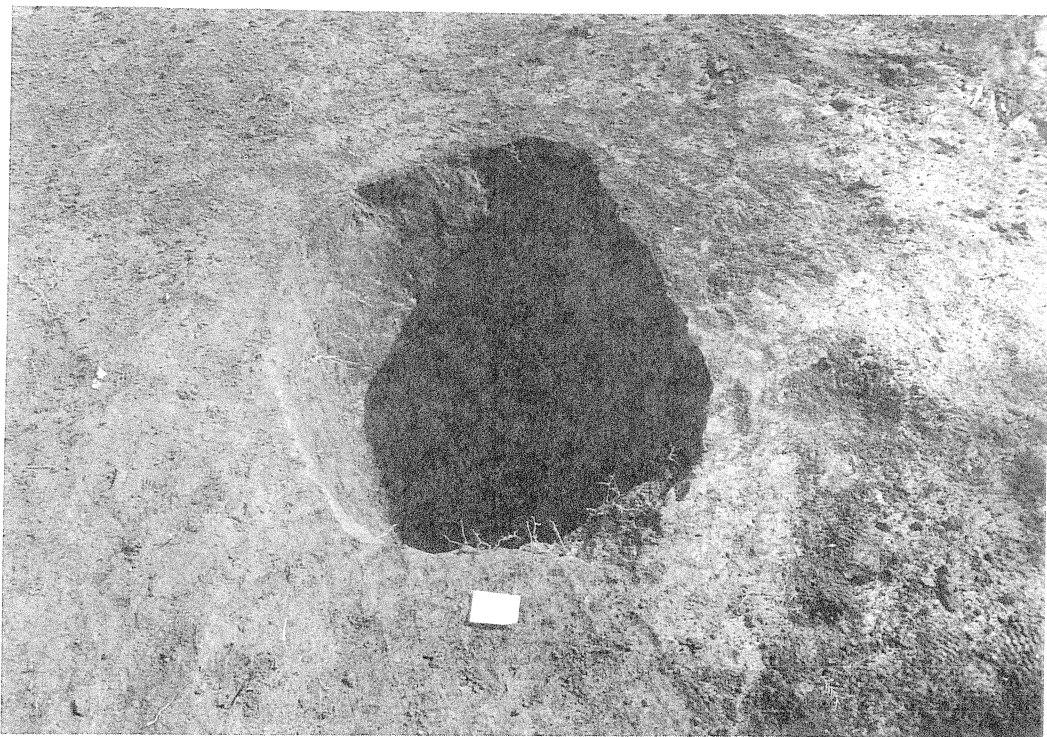
図版15 集石 (D区)



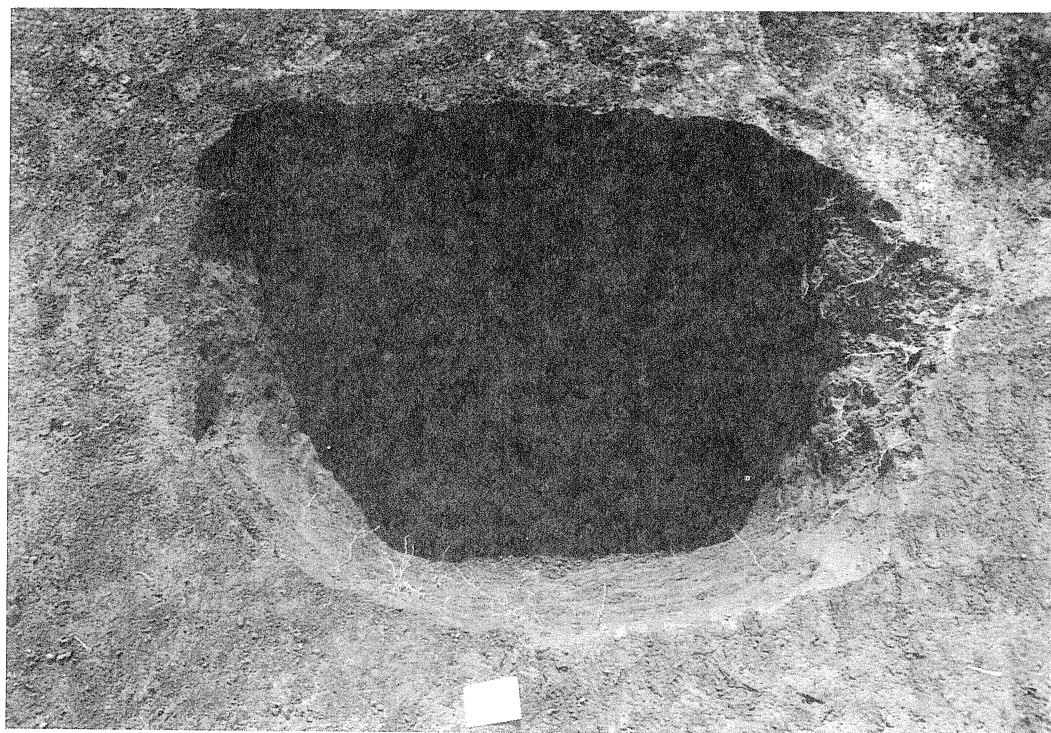
図版16 集石の測図 (D区)



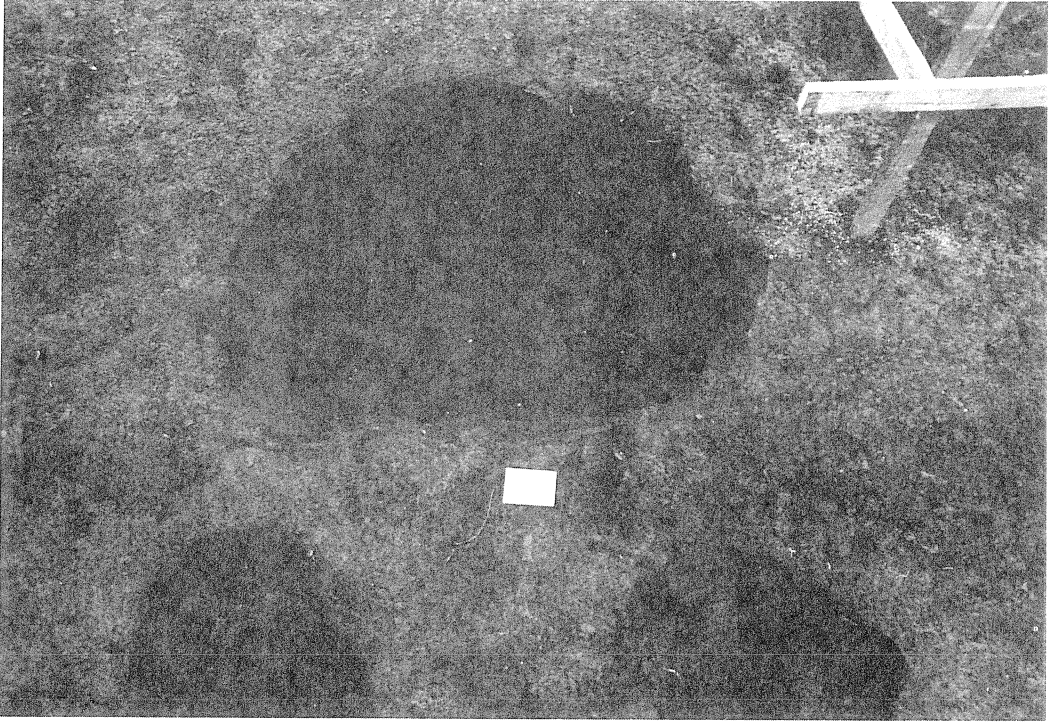
图版17 土 坑 (A区)



图版18 土 壤 (A区)



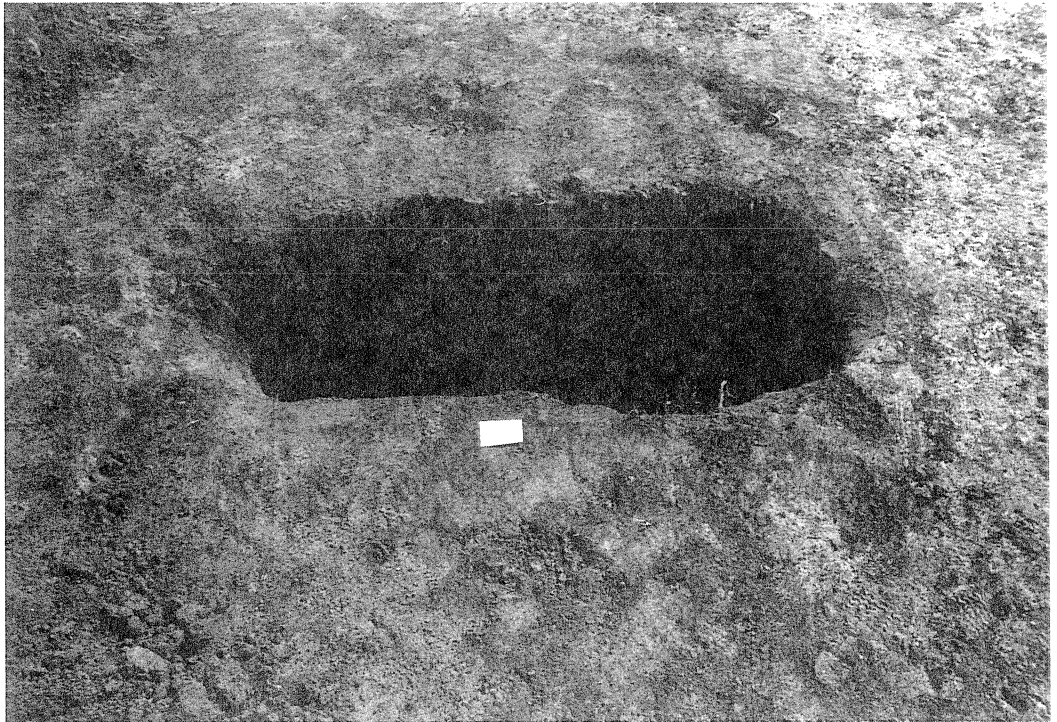
图版19 土 壤 (A区)



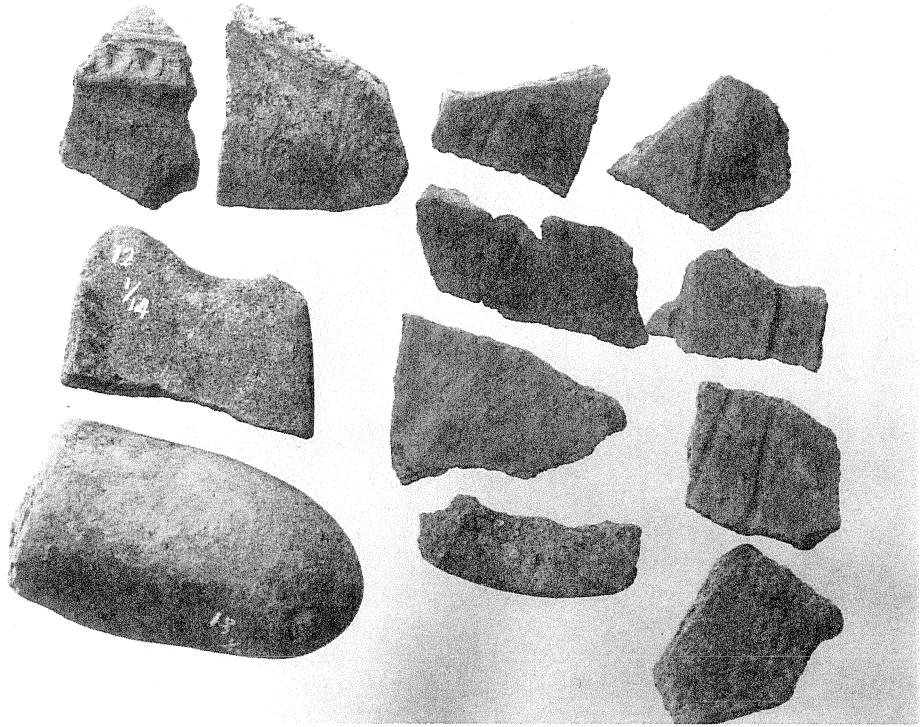
图版20 土壤 (D区)



图版21 土壤 (B区)



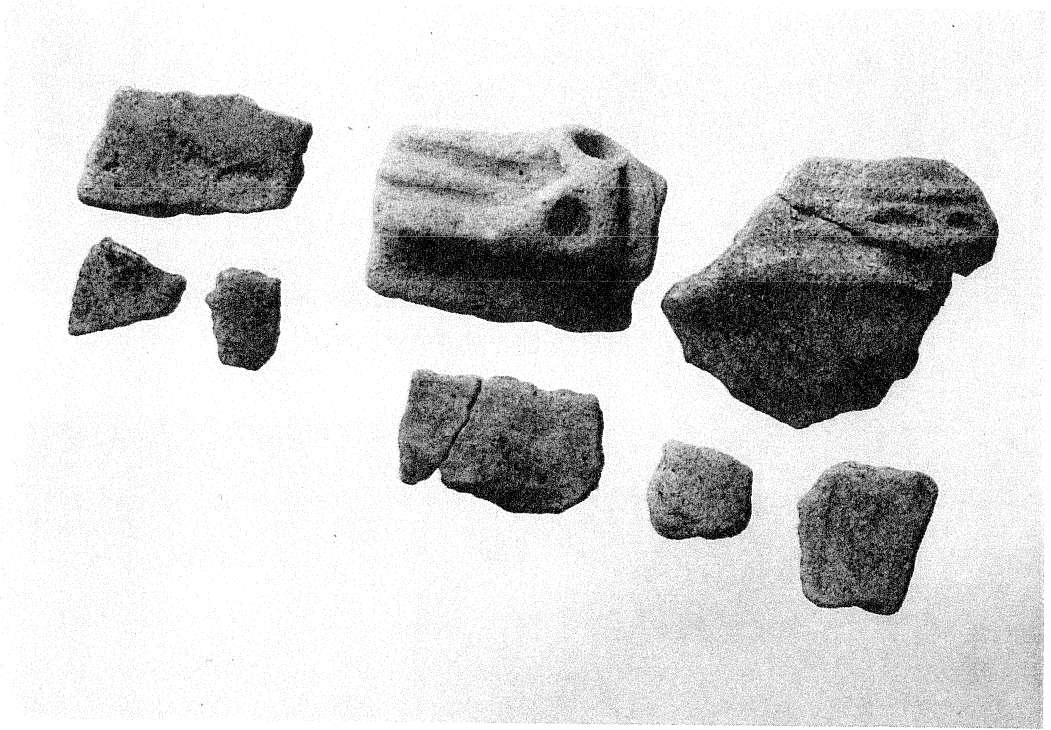
图版22 陷し穴 (A区)



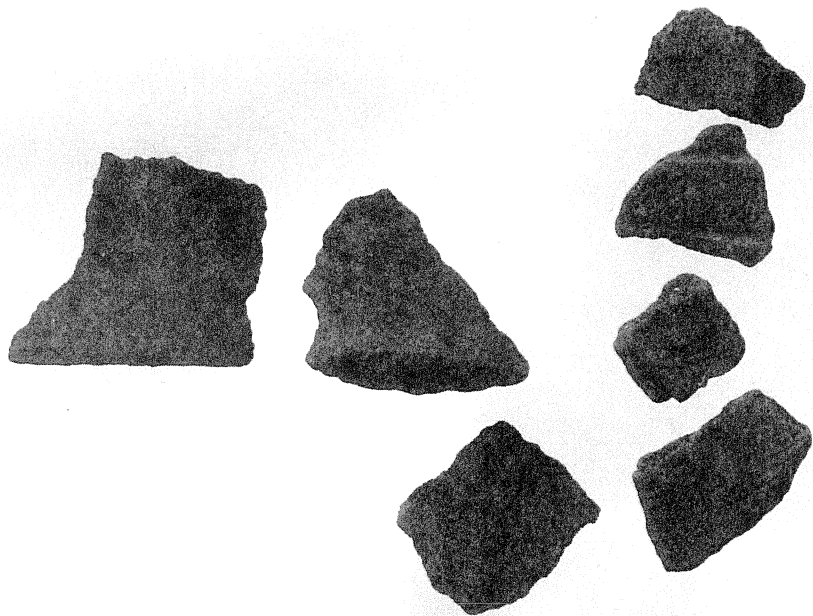
図版23 石器・土器片 '80年試掘のさい出土



集石を形成する礫



図版24 A区 褐色土層出土の土器片 1 : 2



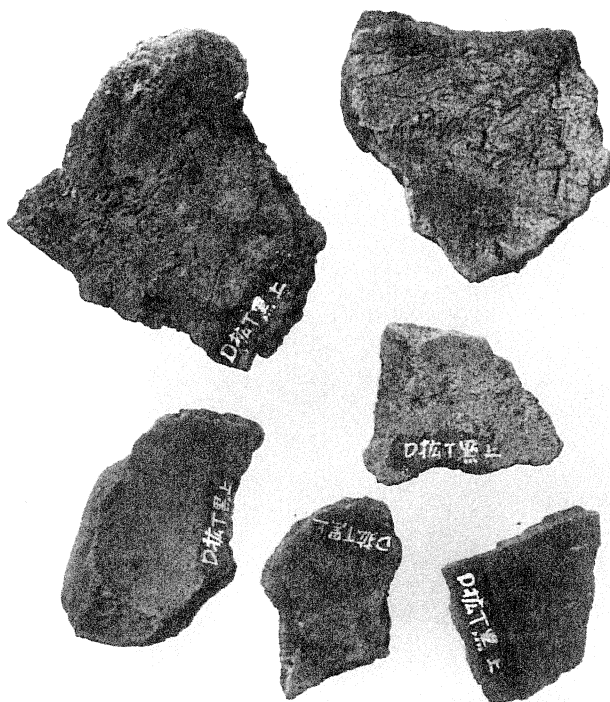
図版25 C区 黒色土層出土の土器片 1 : 2



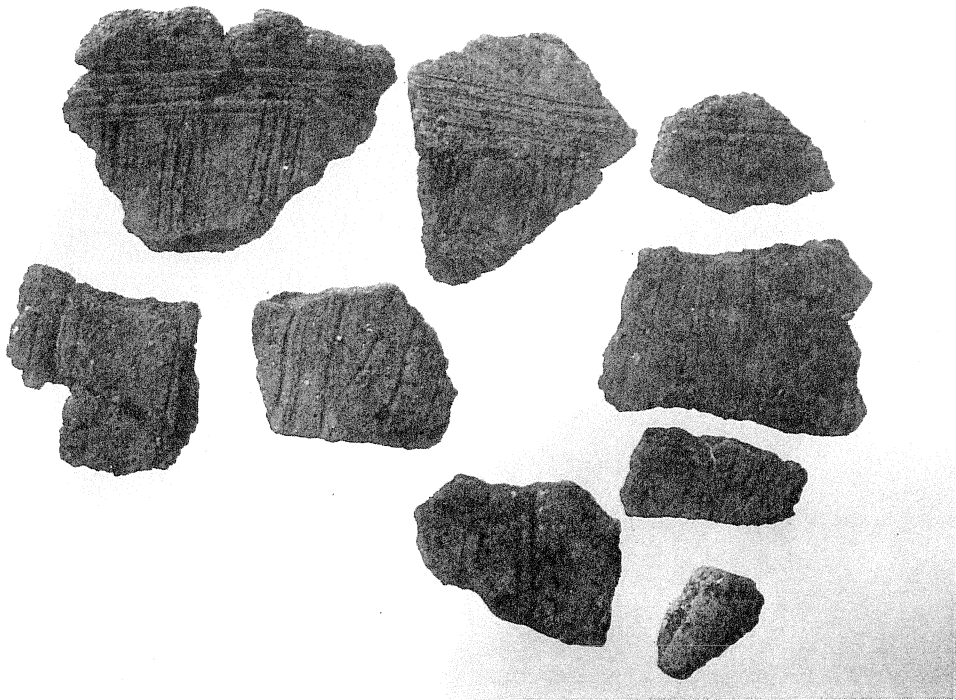
C区 褐色土層出土の土器片 1 : 2



図版26 D区 褐色土層出土の土器片（表） 1 : 2



D区 褐色土層出土の土器片（裏） 1 : 2



図版27 D区 黒色土層出土の土器片 1 : 2



D区 黒色土層出土の石七 1 : 1

常 盤 台 北 遺 跡

発 行 平 成 2 年 3 月 20 日
発 行 者 横 浜 国 立 大 学

印刷 吾妻印刷株式会社

